

第4章

基本的事項と目標



宮古崎 (写真: 大和村)

1 基本的事項

(1) 対象区域

本戦略が対象とする区域は、奄美市、大和村、宇検村、瀬戸内町、龍郷町の管内である奄美大島本島と付属島嶼、及びその周辺の海域とします。

(2) 計画期間

本戦略の計画期間は、2025年度から2034年度までの10年間とします。

(3) 基本理念

生態系管理型・環境文化型の奄美群島国立公園を基盤とした世界自然遺産にふさわしい奄美大島の生物多様性を保全しながら、自然と共生してきた環境文化[※]を大切にし、その恩恵を持続的に享受して、より豊かな暮らしが営まれる社会（自然共生社会）を創ることを基本理念とします。

※本戦略では、奄美大島で長年にわたって育まれてきた人間と自然の関わり、生活・生産様式や人々の意識を含めた、人と自然が共生する生活文化を「環境文化」と呼ぶこととします。また、現代の新しい知見や発想、科学技術を用いて自然環境に適応している生活文化もこの中に含まれると考えます。

(4) 基本方針

基本理念を具体化し目標を実現させるにあたり、以下の3つの基本方針を設定して取組を進めます。

基本方針 1

生物多様性の保全と管理

奄美大島の自然をよりよい状態で未来に継承していくために、希少種だけでなくその生息空間の保全を含めた、奄美の自然全体を保全・回復するためのネイチャーポジティブな取組を進めます。

基本方針 2

生物多様性と環境文化の持続可能な利活用

新たな技術や発想を活かしながら奄美大島の環境文化を育み、生物多様性がもたらしてくれる恩恵を持続的に享受できる社会を目指します。

基本方針 3

自然共生社会を構築するための仕組づくりと人材の育成

人と自然が共生していける社会の仕組づくりと、その取組を主体的に進めていく人材の育成に、さまざまな関係者と役割分担・協働して取り組むことで、奄美大島の生物多様性を保全して未来に継承していきます。

コラム 「環境文化」とは？

この奄美大島生物多様性地域戦略をはじめ、奄美大島の自然環境や生物多様性について国や自治体が策定した行政計画等で“環境文化”という言葉がよく使われます。では、“環境文化”とは何でしょうか？また、なぜ“環境文化”という言葉が使われるのでしょうか？

それは、1992年に鹿児島県が策定した「屋久島環境文化村構想」に遡ります。この構想では、「自然と共に生き、自然を損なうことなく糧を得ながら、長年にわたって人々が形づくってきた独自の生活文化や、人と自然との関わりを“環境文化”と位置づけて、人と自然とが共生する個性的な地域づくりを目指す」こととしています。

奄美大島と屋久島を有する鹿児島県の「生物多様性鹿児島県戦略2024 - 2033」では、「長年にわたりつくり上げられてきた人間と自然の関わり、生活・生産様式や人々の意識を含めた、人間と自然が共生する生活文化のことを“環境文化”と呼び、そこにはこれからの新たな社会づくりのヒントが数多く含まれ、それらを生かして現在の社会経済にあわせて新たに作られるものも含まれる」としています。

奄美大島もまた、屋久島とは異なる自然環境と歴史環境のもとで、自然と共生する文化に根差した暮らしが現在も色濃く残る地域です。2017年に指定された奄美群島国立公園は、「生命にぎわう亜熱帯のシマ～森と海と島人の暮らし」をテーマとし、「多様な生態系について科学的データに基づいた順応的管理を行う“生態系管理”、人と自然の関わりの中で形成された風景や風土を国立公園の価値として将来に守りつなげていく“環境文化”という、従来の国立公園にない新しい考え方の国立公園になっています。保護すべき希少な野生動植物の分布範囲が人々の居住地域と非常に近接しており、これまで育まれてきた、自然環境に適応しながら、季節に応じて利用しつつ営んできた生活文化を継承していくことは、希少種の保全にもつながるという理解から、国内で初めてとなる“環境文化型”の概念が与えられ、地域とともにつくり、地域にも貢献する国立公園を目指しているのです。

これらの例からわかるように、“環境文化”とは「地域の自然と人間の関係を、原生的自然のみに限定されることなく、歴史環境も含めてまるごととらえた考え方」といえます。また、過去の人と自然の関わりに価値を認めつつ、「未来に向かって自然保護と地域振興の調和を図り、島の暮らしを豊かにしていくために導き出された考え方」ともいえます。

参考文献

環境省沖縄奄美自然環境事務所. 2018. 奄美群島国立公園 奄美大島地域及び徳之島地域管理運営計画書.

<https://www.env.go.jp/park/amami/amamikanriuneikeikaku.pdf>

鹿児島大学鹿児島環境学研究会、(公財)屋久島環境文化財団、屋久島里めぐり推進協議会、奄美・屋久島まち歩き連絡協議会. 2023. 屋久島・奄美発 世界自然遺産の里と環境文化.

<https://www.kagoshima-u.ac.jp/information/2023/06/post-1842.html>

鹿児島県. 2024. 生物多様性鹿児島県戦略2024-2033 ～鹿児島県ネイチャーポジティブ戦略.

<https://www.pref.kagoshima.jp/ad04/senryaku2024.html>

鹿児島大学鹿児島環境学研究会編. 2025. 奄美大島 100の環境文化. 南方新社.

2 目標

(1) 長期目標 (前戦略策定から50年後、2065年の奄美大島の姿)

人と自然の共生の物語を見ることができる、我が国における「真に人と自然が共生する社会のモデルとなる地域」となっています。

[目指すべき姿]

- ・ 山から海までがつながりを持った豊かな自然や、人との関わりの中で構築される自然など、多様で良好な自然が維持されていて、多様な動植物がそこに息づいている。
- ・ 自然が活かされ、その中で人々が自然との関わりを持ちながら、伝統的な奄美大島の循環の仕組みや文化を活かした心豊かな暮らしが営まれている。
- ・ 多くの来訪者が奄美大島を訪れており、その自然にいだかれて、それを楽しみ、味わい、体験することで奄美の魅力を深く認識し、それに対する感謝の気持ちを表す環境が整っている。
- ・ 奄美大島固有の環境文化を継承しつつ、市民や産業界を含めた広範な関係者が連携・協働し、新たな知見や発想と科学技術の力を用いて自然環境に適応した結果、生物多様性の保護管理や持続可能な利用に取り組む新たな生業や雇用につながっている。そのような社会で育った島の子供たちや、島に魅力を感じて移り住んだ人たちも、新たな担い手として島に定着している。
- ・ 人が自然に感謝しつつ、節度ある利用を行っており、次の世代へ大切に引き継いでいこうという取組があたり前のこととして実行されている社会が形成されている。
- ・ 人と自然がよりよい状態で共に存在する、奄美大島の社会の姿が広く世界に向けて発信されている。

(2) 短期目標 (10年後、2035年の奄美大島の姿)

長期目標である「我が国における真に人と自然が共生する社会のモデルとなる地域」を達成するために必要な社会基盤、及び世界自然遺産登録地として取り組むべき住民活動の基盤を整備します。

[目指すべき姿]

生物多様性が適切に管理され、良好な状態で保全されている

- ・ 生物多様性の劣化が新たに起こることがなく、すでに失われた多様性をよりよい状態にするための「ネイチャーポジティブ」の実現に向けた取組が進んでいる。
- ・ 希少種を含めた動植物の生息・生育環境がよりよいものとなっていて、盗採等もなくなり、保全の対象となる生物が新たに生じない。
- ・ ノネコ、ノイヌ、ノヤギが新たに発生しない体制が整い、それらの数が減少している。根絶を達成したマングースの再侵入を防ぐために監視が続けられている。
- ・ 島民や来訪者の外来種に対する認識が高まっていて、ペットの放棄、植栽・緑化、人や物の移動などに起因する、意図的な外来種の新たな発生が生じておらず、既に存在している外来種の数も減少している。
- ・ 鳥獣の科学的な個体数管理が行える捕獲従事者による捕獲体制が整っていて、鳥獣の数の適正なコントロールがなされている。
- ・ 自然環境や生物多様性の維持管理において、各分野で必要な考え方や手法が指針や手引書等として整備され、それに基づいた取組が進められている。

生物多様性と環境文化が持続的に利活用されている

- ・ 生物多様性の保全に配慮した第1次産業が営まれており、伝統野菜を含め、島内で生産された品物が積極的に利用されている。
- ・ 豊かな自然と共存する人々の知恵と技を活かした、持続可能な観光の提供がされているなど、活力ある地域となっており、それを国内外に向けて発信している。

人と自然が共生する社会の仕組づくりに取り組む人材が育っている

- ・ 生物多様性や環境文化についての島民や来訪者の認知度が高まっている。
- ・ 人々が生物多様性や環境文化について触れたり学んだりする場や機会が十分に提供されている。
- ・ 島民、事業者、学識経験者、来訪者、各自治体など様々な関係者が役割分担・連携して、それぞれの立場で生物多様性の保全に取り組んでいる。